

世事百談

二

15
1636
1



門イB
號 1636
卷 1



世^セ事^シ百^ヒ談^ヤ卷^ク之^ノ二^ニ目^メ録^{ロク}

物化

寺を瓦葺と云

京間 田舎間

斥畧山野若也

人只腔炙す

神社の徑階

弥陀の手系

をうきい念佛

謠抄の勅文

小奇

下野國茶師寺

乃成吉

さうもろさ

格天井

蘆津魯山の奇

こき笛

氏非

鳥八旧

木魚

浄土の評

昭和八年八月廿日寄
原安三郎氏贈

腹子子化あるうき
 三味線
 ありふ履
 鬼帝を止す諺
 方言

節がけれ名目
 琉球の小奇
 一栞の陰子宿も他生縁と三詞
 手甲

世車百談卷之二

物化

譚子化書子老楓化為羽人朽麥化為蝴蝶有言情
 而之有情也賢女化為貞石山蛭化為百合自有情
 而之有情也
 鳥獸昆虫の變化するものハト云々
 子田鼠の糞子化雀の糞とあること
 此れ糞子化するものハ世の人常小目あれと云々
 見聞子あれと云々
 蛸魚と云々
 雜志子蛇の蟠りたる龍子化してと云々
 山居四要子

ありのうへあや人をとやうにけつてをくううくおんをわたり口ハ
しおろきくまけて體ハ足すく延るもえをを動脈の運動體の上
にあつられてるも氣をころきんちん一人の老嫗をばあうくつるも桑
香をさくく挿の本へうくやくときハ三ひきのめれあふふ必ひと
つら及鼻子化する桑香あつるものとぞさればいつある桑香の變化す
るもやそのえんけハせれもあつるれどつれも香を焚れハ金身こ
とくも及鼻とあつるところきころきころきころきころきころきころき
雞尾のの子をれ家あつるを蔵すハ是性あり三豆あつるのハ本
下野國のふりやぐード

下野國藥師寺

あつるの子ころきあつる
下野國のふりやぐード
藥師寺ハ國史にをえんて三戒壇の一あり

おー鑿真本為我朝一律部を傳人弘めりゆ一財聖武上
皇此報子よりて東國の沙つハ此寺の戒壇より受戒すく
西國の沙つハ筑紫北觀音寺より受戒すく中國の沙つハ
大和の東大寺より受戒すく三所の戒壇をば言つた
まうこれ今の世よりて奉寺本山より受戒すくのとハおのん
をくく鑿真本尚此ことハ宋の高僧傳扶桑畧記元亨新
書奉朝言傳傳及ひ思託の東証傳子よりて人此をさころつ
れハ駿場より三所をうく前藥師堂とあるあり種橘の
日きより奉堂よりこれハ藥師如來を安置し左右ハ弘法興教
の二大師をおき前子珍并等を並べり傳持此傳くえんてハ
州鞋ををき井の石よりあつる鋤を洗ひてあつる知事傳とを

多々、左の方龍興寺あり、今ハ焼失して小堂小屋のみあり、堂
北左子小き木戸ありてその内ハ小き岡あり、これを弓削道
鏡の墳とす、上子ひとり古碑あり、文字存せざる、
のとは仰下のうささし、鑿真の塔あり、そののりあり、道鏡
の碑子似し、右左ども正面鑿真大木あり、天平宝字の年
号あり、皆少小碑ハ古物あり、文字の漫滅、志たれハ後世彫り加
つてそののと見え、前子菩提樹を植り、これ又鑿真の菩提
樹子で、木末のこ僧傳子見え、これハその縁をききあり、この地
ゆき遷化子あり、好くも戒壇を開き、律ハ鼻祖あり、この
所子塔を建たるあり、五百年なり、さき子密嚴律師の業
師寺を中興して戒律を弘えり、もと本朝僧傳子見え、これ

ハハの菩提樹ハ此時ハ樹ともあり、今樹すハ扶桑略
記より見え、ハ唐子て鑿真の寺を龍興寺とす、
鑿真此入滅をきて唐の龍興寺あり、大法會を終すと
あり、この墳寺を龍興寺と名あり、二寺とも、美師寺の
遺跡あり、安國寺ハ本坊龍興寺ハ二院子、墳寺の残りた
るあり、故ハ安國寺ハ古瓦多し、龍興寺ハ古瓦を存せ
これとす、
薬師寺駒小亭此塔下子あり、駒山西教寺
潮音ハ一條ハ駒山師の地子遊歴の寺記あり、所ハ地寺
あり、駒山師ハ大蔵ハあり、お清此持識あり、
子持く、予も夢て俱舍論の講談を聞きたるあり、
出定後説を弁破したる、
撰録邪網編印終して世子流布す



①
七
一



②
五

字なるぐ、格ハ隔と同、四方子、格をきくと唱ふ
ハ音便、好、己ハ格子をきく、との字ても抄、その後、
偶奇をきく、天井のたと頂格と、これ即格、天井あり、

斥岳山の賜答あり

左を達磨との斥岳山、此賜答の如、
あり、法華帝詔あり、
のを、斥岳山の飢人を文殊菩薩あり、
奥義新、お子、
小及び、殊子異説あり、
類と、

蘇迷魯の山此奇

大雑書の考、首小須弥山此圖あり、その傍にあり、歌、

北を黄小南、東、西、

とあり、四方の配色ハ須弥山、北ハ金山、西ハ紅波、
南ハ吠、
蘇迷魯、
翻、
い、
和泉武部、
さ、
休、
紅子、

これと云々人々これにむすべし其の意を以て人の子を膾炙すべし
あもついで出づるもその意を以て

人の子を膾炙すべし

世人の戒めよ

その意を以て人々これにむすべし其の意を以て

これハ鴨の長明が有る

何の意に捨つるを以てをりてハ其の意を以て

これハ園光大師の熊谷蓮生子ありされし其の意を以て

えん

身を捨ててこそうむ世もあれとの意を以て

撃劔家の伝書と云ふものありて其の意を以て

るものまればありて世に上人の意を以て

山川にありて其の意を以て

まゝ尤字紙のうらふの意を以て

わのうのやけ心のひくすの意を以て

まゝ世人の口碑に傳ふるは

河水に流れるるの意を以て

く異同ありて其の意を以て

と云

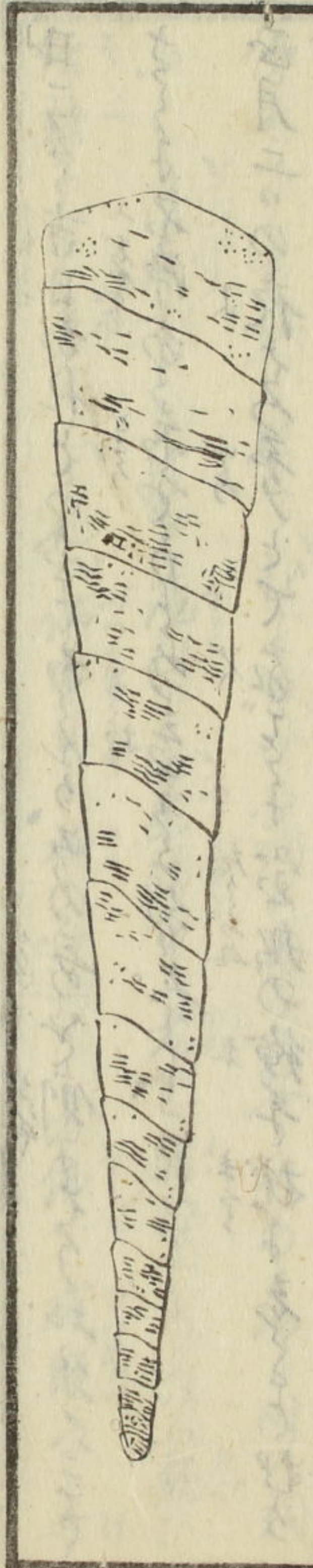
四月ハ子家とて則ち子なり

あまやうの卯月ハ吉日よ神さけ

この意ハ其の意を以て

志ひて詠べしはあまのり船ハ船のつらや常と別をる俳諧
 世話焼草の附合子戸とるまをその船とありうれハ波よけ子
 戸とある船をいふもあまのり一の寄假字つひの詠り詞のこと
 ころをそののをさるハ回又おれハあまのり

二さ笛
 蝦夷人の吹く二さ笛といふものハ長さを人五寸すよう二尺まで
 して大小あり吹口子竹の管を入れ異木の皮をさうくと巻く
 丸く刺しつるめれあり



古歌よ

二さ吹ハ暑うもやせんちのく此蝦夷ハ元々茂林のよ此月
 おりふ子二さ笛す笛ハ二さ笛といふものありは此古歌の意
 ハ笛のてしハおれをれハ龍宮船といふ書子蝦夷人の二さ吹くと
 いふこと此地の人の事務を吹やしく吾身を隠す術ありてせんす
 べからくせまありたる射ハりの二さを吹きて身をうらふりしうそ
 の事ハ歴史ハともおれ寄のころハこれとやあまのり似たり

神社の位階

神社ハ位階を授くることハ号甲をさうためしハあまのりこれハ正五
 位多ハ田十二町ハ正位多ハ田二十町を奉りしうらうれお
 正一位多ハ田八十町此神領を号附すりハこれを位階と言ふ

まこと、今此言のどしきを今ハ二歩田もきく有名無実子
して稲荷と云ふハ必正二位あるものと世も多社家ありも
免許すこととす

氏神

俗子あすきの神社をいふ氏神といふはあやまりあるは
ありといふありは人因日件録子世人神明主于我
所生之地謂之氏神といふはをきとあもあはるる
と氏神といふは春日明神を祭らどきりる氏の神をいふ
是伊勢物語子むろ二條の后まき春日の御息所と申
小氏神子まきむろむろといふありこれハ大系神の社をいふ
古くあき集子ハすむろ大系神子まきむろを書り藤氏此氏

神ハ春日明神あれども京ありハ及のやとをたれハ仁明天皇
嘉祥三年子周院左府を嗣のむろ平山城大系神子勧誘
ありあり王城ありむろ及氏の守護神といふありあり
吾妻鏡子平家の氏神といふありあり平家の社をいふ平
孫を平氏の氏神とするありハ古事記傳子むろ人まき平
盛衰記子一橋の神松を護りむろありハ神護者と名づけ
りあり此寺を和氣の氏寺ありとあり、神社のありハ氏寺も
ありとあり、平氏神子子の辨れありまきありハ平好同質
疑子ありたれと今むろむろありありありありありありあり
弥陀の手系

新古今和歌集の法園上人此あり

あむあむと仏の心子と云ふ系れ終りてはれぬんまご

長林記元永二年十二月四日の條、阿弥陀佛手付五色
糸引付件、佛去年臨終料、丁寧所奉作也、まご盛衰記
小仏の心子、小を緒付五色、此糸引久たまへるん地よてまご
もつと云う奉説のつりき、は法苑珠林、西域祇洹寺圖を引
てまご

鳥ハ白

禪宗の寺院、延宝元祿此二あり、石塔の上のまご、鵠あむハ
鵠あむハ、鵠あむの文字を彫りたるあり、あま音の傳ふまごを
知れぬのまご、むりより、鳥ハ白と云ふ事、此のまご、何れ義と云ふ
と詳あむす、平弱冠のまご、周々梅塲先生の説、二ハ随末兄の

中あむハ、切元と云ふ文の、字を釋、鵠と云う、その鵠字

をあやまりて書きあむ、まご鵠字、まごれまご、功徳あり、
ハ曹洞引導集、あむあむの子、あむと云ふまご、その後大随末陀
羅尼、經をよめ、不、説とありて、經子、時被、苾芻無救
濟者、作大叫声、則、於其處、有一婆羅門、優婆塞、聞其
叫声、即、往詣、彼病、苾芻、所、起大悲、愍、即、為書、此、隨末
大明、王陀羅尼、繫、於、頸下、若、惱、皆、息、便、即、命、終、生、無
間、獄、其、苾芻、屍、殞、在、塔、中、其、陀羅尼、帶、於、身、上、因、其
苾芻、繞、入、地、獄、諸、受、罪、者、所、有、苦、痛、悉、得、得、息、咸、皆
安、樂、阿、鼻、地、獄、所、有、猛、火、由、此、陀羅尼、威、德、力、故、悉
皆、消、滅、と、云、う、大の、經、説、あ、む、隨、末、兄、の、功、徳、ハ、あ、む、ま、ご、の



菊庭幕

二五



揚子でを建立を肌くそのころろをんあうすまごやん

二六

その弟子命終して海中身を交大魚となりてその背に
上り大樹を生じ苦悩を受たりしが此師舟子乗りて海中
を過る魚ありしを怨むるありて此師弟子の罪を
消滅せん為此形を造り佛前におきて日ごとこれを打鳴
し経をよめりともや、この事大智度論にありともあはひ
婆娑論にありともす、経論中にありともあはひ
かき妄説あり、あはひも舟あり五百阿論に師弟子怒りて
す、その弟子龍身を更なる舟舟子乗りて海中を過る、その
龍師をうらみ舟をくぐらんとせしむ、師罪を悔み、自水中
に身をあげるといふ、是れは、此の正に附合して本魚と
いふ文字よりて魚の背に樹生るといふをとりつくりまゝに

あはひ、こはもと本魚といふ本魚にて造りたる魚といふて
魚の背の上本ありともをとり、あはひ、玄透ある傍規の首書
佛後圖彙をの書に三才圖會に本魚刻木為魚形空其
中敲之有聲、釈氏謂阿浮提乃巨鰲所載、身常作瘡
則鼓其鬚、山川山為之震動、故象其形擊之、此荒唐之
説、然今釈氏之費梵唄皆用之とあり、これふも己子荒唐
の説といふ、古今魚始に本魚、隋僧志林作とあれ、此
人も僧傳中よりいふ、是れとれ、唯百丈清規に相傳云、
魚晝夜常醒、刻木象形擊之、所以警昏惰也、とるぞ
正しき説といふ、さて明の瞿祐が本魚詩云、長扇懸掛

發鯨魚鱗甲光芒欲倍尋と云うこの詩は抄びきりゆくハ
初めハまゝ懸ておろす魚形化收ありけり後子形の變りて今
の如くありても懸懸る如く人並ておハ後のことにてこれを抄
りて經咒をよめるハいやくまゝ後のことぞ抄りて

謠抄の勘文

謠曲の抄和子謠古抄と稱す注釈ありその書の時代は文祿年
同子撰ミ一のの抄とをいへり第一の熊谷の注小百聯抄解
のことと云ふんとてこの年ハ嘉靖四十二年あり書如
文祿四年乙未年までハ二十三年ありとあり又芭蕉杜若等ハ
もこ子同におひむき子載り抄りてこの謠抄の撰ハ人の手
子ありと云ふのハあるはと云ふその體ハ經の注子一仏成道觀

見法界草木本國土悉皆成佛と此文を山門宝地坊證云ハ中
陰經の文とハ引これと今彼經を考ふるにありて遊
折の注子中陰經云草木本國土悉皆成佛と西行櫻の注子草
木國土悉皆成佛是中陰經の文也云當麻の注小中陰經三一
佛成乃觀見法界草木本國土悉皆成佛と説たまふをい
是ハ後の三條八宝地坊の説と云ふの一條ハ他人に云ふと云
一これよりて抄りて小これ抄ハ諸家の説を集録したるものと
云て抄三稿の注子未歷ハ抄及より記しと云ふきゆのあり
阿僧の注子誓のあり吉田殿ハ尋ねあふぐまゝ並年れ
注小我たるま敷山のてあり委とハ天台宗ありと云ふ人
一小蓋の注子抄もあつたる座の世わ克同塵のそ吉田殿注

あふぐー、蟻通の海子、おえ此未小神居ありあきりや下、修其
の海子山中、椽技中す、葛城の海子、紹巴中、以、あれは、これ
家、の、説、を、集、め、ら、れ、し、め、と、あ、る、ま、と、前、の、中、に、お、り、あ、り
典、授、の、つ、ま、び、つ、ら、あ、る、と、あ、る、そ、の、富、士、大、鼓、の、海、子、あ、り
こ、う、か、手、と、出、し、ら、ん、ら、う、が、涙、あ、る、も、此、故、事、往、古、より、い、ま、ど
ん、心、す、又、静、の、海、子、を、あ、り、つ、れ、さ、ら、く、自、昔、此、故、事、知、れ
ざ、る、あ、り、自、然、居、士、の、海、子、然、北、は、あ、の、知、れ、字、と、公、す、す、む、と
書、た、り、船、の、字、と、ひ、ひ、く、舟、の、字、と、す、む、と、讀、た、り、訓、え、ん、ら、
を、く、八、建、仁、寺、の、月、舟、へ、相、國、寺、に、惟、方、の、と、つ、れ、た、ま、と、も、つ、ひ
子、え、ぬ、と、あ、つ、く、と、出、ま、未、審、こ、れ、を、も、て、あ、り、梅、村、載、孝
小、季、次、園、白、の、時、謀、百、十、番、を、海、子、れ、し、五、山、の、僧、流、お、國、吉

慈照院子聚まり、故事、其家、へ、尋、ら、れ、り、知、れ、ぬ、事、と、も
多、う、と、い、ふ、子、全、く、符、合、せ、り、於、載、孝、子、云、遊、子、伯、陽、が、月、を
愛、せ、し、と、唐、土、の、さ、ら、は、花、子、身、と、捨、つ、と、あ、る、こ、う、か、手、と
出、し、ら、ん、ら、う、が、涙、の、と、船、の、字、と、公、す、す、む、と、書、た、り、と、あ、ん、と
の、類、少、く、不、審、あ、る、と、い、ふ、れ、り、俗、間、子、古、今、和、歌、集、の、海、子、と、や、ま、い、し
ふ、き、假、名、う、き、の、お、あ、り、遊、子、伯、陽、史、記、に、あ、り、と、云、栢、國、後、傳、書、不、あ、り
と、云、ふ、大、お、の、海、子、を、れ、れ、と、す、と、謀、子、依、り、た、る、あ、り、此、時、元、信、と、云
傳、足、利、あ、り、上、洛、し、て、大、仏、の、辺、に、あ、る、と、い、ふ、詩、の、柳、凡、柏、舟、を、柏、子、す、む
と、い、ふ、あ、り、舟、に、蓋、也、と、辨、毛、披、蓋、と、い、ふ、書、に、あ、り、と、て、片、紙、子、記
し、て、言、上、す、諸、人、其、の、本、を、見、ん、と、い、ふ、と、い、ふ、と、を、秘、し、て、出、さ、し、
栢、陸、より、急、子、詰、同、せ、し、ル、ま、二、件、の、本、を、出、す、用、き、え、れ、ら、



三又三



三又三

おあがゞ雲形も影くとおろく名もハおやゝや月々入サてとと
そ子見ぬ月うかやをけき、

淨瑠璃の評

あん不きうのき、しめんどいど
南畝翁記子内歎童子の忌日八月十日あり、大江山千丈が嶽
の由來縁起子見せり、童子の母と越後此のあり、敷山子より
見とあり、甲陽軍鑑にもあり、今も越後子童子屋
あとのあり、を松が内歎童子枕言系とて浄瑠璃本子童
子が母に童子を愛しく成長子つるまで乳をのませしゆゑつ
ひ子人の肉を食ひしとて、迷憐の原あをれ子、聞し西鶴が小夜あ
らゝ子、閻魔王の地獄を落るさるもあをれを色あり、名人のう
るものハハやあるこれたるものせそのあをれ子見守ること

筆力の妙あり、吾妻淨瑠璃の清玄がさるの忠々を護摩
の火子とて、行りしんされどもあをれのあをれは、どぞせんこゝそ
まゝうらうらの清玄が、さるのうらあをれを、あくり、かたうら
ぬらうらうと、かたう、今の世れ下子、信者かき子ハあられと、ハッ
し、おそり、と、あをれ、と、あをれ、心ハッあり、あをれと
うらう、丈夫と小あ、情を、せ、いふ、
隣の小女が、豊存、あ、の、あ、を、ま、ハ、ま、橋、の、洞、子、生、で、ん
す、を、ん、す、こ、ら、う、抱、き、つ、き、よ、い、ハ、何、を、誰、を、さ、ら、う、文
し、並木五瓶が、信、あ、う、五瓶ハ、上、方、れ、子、て、以、戸、の、ま、橋、の
詞、ハ、あ、れ、人、情、ま、ま、橋、の、詞、を、ま、ま、て、ら、う、あ、を、れ、を、き、う、あ、が、
う、ら、信、者、さ、ん、五、人、切、の、あ、あ、う、ら、う、

か前子く平家とくく子琵琶の三重を上手りといふと平
記子又くく人

三味線

三味線つめと重樂の音子で、琉球ありき、海地皮りく
張る北廿何ハシヤトセンとく、文祿年間替若石村換授それ
か茅の平家傳といふものとおきく琉球國子海子兄の換授ハ其
曲を習ひ茅ハそれ製能をわくひゆく、石村平家傳をいめて
三味線をくちくく、そのまハ寸尺さく、さてめ石村換授が琉
球子で習ひたる唄、

千ヤウリヤウ、フリヤウ、ソレヒヤウラニリヤク、ニイヨアリヤヨイ、フ
リヤウソレリリヒヤウフリヤウ、

このころ三味線の手あり、石村換授のまゝて唄、

あまの始れてん子照る月ハ十五夜が成り、あれ若さま
ハ、つらもさうりよか、

換授これ子次まきく七組の曲を唄、琉球組もその中あり、この
時於三味線の寸尺さく、一三三子、上駒とくく、その茅
子虎傳換授あり、子六組を唄、その存柳川換授をいめて
三味線の長さを、寸尺を分と云む、それ茅子浅利換授、佐山換
授、市川換授をいふ、三味線の名人と稱す、と子佐山換授の
端子七組を唄、手事といふ、さく、二上りの調子を
いふ、彈出す、若く、といふ唄、二上りの調子、れ、あ、あ、この後
連川換授、一りの調子を引い、とく、とく、

本手組十三組、子組七組ありて二十組あり、今も京大坂にて
 法師のありひ傳へ、やんざれまあう、此好まゆふ、あむひ神仏の
 法樂ありてハ、弾くことあり、さうりあむ、此人の為子孫きて、
 すゝとせゆるさん、強くお望すれハ、復すこと強くあり、こゝに法師
 といふ者ハ、口分の替者にて、芝居を言するの浄より、小高をハ、座より
 と唱へ、強くをうく、いまむを出入

- 石村檢校 — 虎澤檢校 — 山野檢校
- 石村平馬 — 柳川檢校
- 浅井檢校 — 伊豆檢校 — 岩崎檢校
- 佐山檢校 — 河村檢校
- 市川檢校

琉球國の小高

琉球國ハ、今もまゝ、三條線を越え、あり、京師、播川、南後
 といふ人、天明のむじめ、薩摩國ハあむひ、とろ、琉球乃喜登筑
 登る、款、崎、基、字、ハ、延、純、と、い、ふ、の、三、條、線、を、弾、き、者、同、筑、登、之、紹
 進、道、字、ハ、隆、嘉、と、い、ふ、れ、小、高、と、唄、ふ、を、き、な、す、時、の、尊、記、と、て、あ
 る人の名をせん、

きよのそら、じやま、おれ、が、な、を、う、つ、つ、で、を、と、れ、の、つ、わ、け、
 ごと、

こゝのハ、祝、儀、れ、と、い、ふ、始、め、を、う、り、子、唄、や、り、言、妙、の、謡、を、う、つ、
 が、如、し、と、い、う、を、い、り、さ、う、が、子、二、人、小、高、と、い、ふ、小、高、
 こゝの人、れ、う、ち、よ、つ、ぶ、ま、て、つ、ま、あ、よ、ら、れ、も、ま、く、れ、ち、や、あ、ら、

どのふハ蒙古國義とのやとのいあやまあり鬼がいたハこれ
夷賊そのあけり又いけ子まきと威嚇とき顔をかめて元
兵とのいありむり大和國元兵とのい鬼すとて人
とあやまるとして世間さぶきとあり本朝文解子とて二
星して元兵とのい顔をかめて地をせよ小兒かまむとて又小
児をすりいけるとき虎狼まくといふとありむりいけハ張
遼まるとい小兒まきやむとあり張遼といふものたけき兵にて
ありとあり又日本までまきとて教子あてむ甲とのい小
児とあむとありとありとありむりいけハ櫻陰
齋藤子とい元兵とのいハ南敵著言子ありと地をむりい
甲とのいハ今王佐國にて見事とのい常の遊戯子すとてそ

の國人祖父江氏のるい訪ひ来れしそり此おがり承それ
殿ハ左右の手と組合せて手此甲をたひしうち暗くしあが
らと今今その詞の終りまはるのい鬼とさむむすい
その夢人詞
おろの河東で土器やけハ五皿六皿七皿八皿ハ四めいおれそ
づんどうき人それこそ鬼よとてこそ鬼よ羨ましく望まきて
くらそこの鬼よ
方言
漢の揚子雲、輜輞絶代語の撰あり世に揚子方言とて人曰く邦
あくを来越谷吾山といふ俳人の物類稱呼とあふくありあ
人右の國此方言をすべしとて

あうありとつやを誰たれもいふてまてむとてつう調しらべの調しらべはかきあり
てむつえんとおれあり、すくく國くによりて品物しなぶつの名は異ことあり、さきも
あふきとあれと調しらべの執と執とはたうく音使ねんじんよりうたれて終つひは調しらべのも
そのころなと多おほく、

世よ事こと百ひゃく談だん卷まき之の二

